

古代木製食器の組成と特徴に関する検討

鄭 修 鈺

- I. はじめに
- II. 木器研究の現状と研究方法
- III. 古代木製食器の組成と特徴
- IV. 古代木製食器の変遷と画期
- V. おわりに

要 旨 近年、低湿地遺跡に対する調査が活発に行われ、木質遺物が多数出土し、考古学の一分野として注目を受け始めた。その種類は、日常生活具類や農工具類から建築部材まで非常に多様である。本稿では、多様な木器の中でも食器類に対する検討を通して、当時の食卓文化を明らかにしようと試みた。木製食器類の場合、古い時期の手斧類で削って作ったものにはじまり、三国時代になると回転削りや漆塗りを施した高級な製品が生活遺跡から出土する。それらは遺跡ごとに特徴があり、製作技術や組成にも差異が認められる。特に、百済泗沘時代の中心地域であった扶余の最近の発掘調査事例を見ると、双北里等では高度な技術で製作された高杯や容器類等が出土しており、木器においても階層区分のなされていたことがわかる。製作技術の変化をみると、原三国時代までは手斧等の工具によって製作され、丸い形態よりは四角い形態の容器類が多く、全体に器壁が厚い。蓋は身部が平坦なものが大部分で、端に短いかえりのつくものが多い。漆器も出土しており、その製作技法をみると、主に黒色の漆を塗り、下地漆はほとんど施されない。三国時代になると、ロクロを利用した回転削りの技術が一般化し、胴部が丸い形態のものが主流になり、器壁も非常に薄くなる。蓋は身部が膨らんだ形態でつまみを持つ。漆器の製作技術も変化し、漆層→朱漆層の順で塗られ、下地漆の使用比率が高くなり、骨粉や土粉を下地漆の材料として用いた漆器が登場する。一方、日本の木製食器類は、韓国に比べ非常に多様であり、これらとの比較検討を通して、韓国から出土した木製食器類の用途や製作技術に対する様々な答えを探すことのできる良好な比較資料を提供している。また木質遺物の中には、日本で産出する樹種が確認され、日本との交流があったことを知ることができる。このように、木製食器類の検討を通して時期ごとに差異があれば、そこから、発展のありかたや遺跡の階層化の進行の様子を知ることができ、また、当時の日本と活発な交流があったことも知ることができる。

キーワード 木製食器類 容器類 食事具 漆器 木器製作技術 食卓文化

I. はじめに

木器からは、土器や石器・鉄器など他の素材の遺物と同様に、生活や社会の復元に関する多くの情報を得ることができる。例えば、日常生活で使用された農工具類・食器類・家具類・建築物だけではなく、樹皮・葉・花卉・果実類・樹液等、樹木は人間の日常生活において非常に広範囲に利用されているからである。

木製品は、そのような有用性と材料の採取や製作が容易であるという長所のために、古代、すなわち人類が道具を持ち始めた時から、石器とともに重要な道具として使用された。このため、古代人の生活、あるいは技術的側面において、木器は大きな比重を占めており、過去の物質文化の実態を把握し、生活相を具体的に研究する上で非常に重要である。しかしながら、木器という遺物の性格上、遺存状態の悪い場合が多く、低湿地のような遺跡から腐食していない良好な木器が発掘されたとしても、保存処理や保管に多くの費用を投資せねばならないという難しさもある。

石器や鉄器の場合は農具・工具・武器類等、土器の場合には容器・調理具等にその用途がある程度限定されるのに対して、木質遺物の場合、工具類・農具類から建築部材にいたるまで、非常に多様な種類のものが出土しているため、他の遺物研究と同様に個別研究資料としての研究価値が非常に高いのである。

そこで本稿では、木器の中でも食器類に分類されるものの出土事例とその特徴を検討してみることにする。また木器も、土器や鉄器等と同様に、製作技術の発展過程が観察できるため、遺跡ごとのありかたや特徴を把握することによって、古代の食卓文化の階層的・時代的な様相も合わせて明らかにしてみたい。

II. 木器研究の現状と研究方法

1. 木器研究の現状

木器は主に低湿地遺跡から多く出土しているが、これは、低湿地という遺跡の特徴として、外部の環境から腐食の進行が食い止められているためで、木器やわらじ・植物珪酸体等の遺物が良好に遺存している。そのため、低湿地遺跡や水田・水路のような遺跡の発見とともに、木器に対する研究が始まったと言っても過言ではない。低湿地遺跡の調査は、1958年に北朝鮮の平安北道做儀里（4～5世紀と推定）において、クヌギ製の唐犁、車輪が泥炭層から出土したことを嚆矢とする。1992年の追加発掘の結果、さらにもう1点の唐犁が発掘された。しかしながら、その出土量が少なく調査研究が本格化しなかったため、それほど注目されることはなかった。韓国では、1968年に大邱達城土城の下層泥炭層から高杯・瓦質土器・炭化木材等が発見され注目を受けた。

本格的な低湿地遺跡の発掘調査は、1975年に行われた慶州雁鴨池であり、予め低湿地であることを推測して行われた学術発掘であるという点で大きな意味を持っている。この他に昌原茶戸里、光州新昌里、務安良将里、慶山林堂、論山麻田里、扶余陵山里、咸安城山山城等においても低湿地遺跡が発見され、徐々に学界においても注目されるようになった。特に、光州新昌洞では、最古の弦楽器、緯打具、馬車付属具をはじめとして、発火具・扉・靴型・鞘・扇の柄・儀礼用木器等の多様な木器が、韓国国内において初めて出土した。これらの豊富で多様な木器の出土を契機として、韓国の先史時代文化研究において、石器・青銅器・鉄器に加えて木器が重要な研究課題となった。また、この遺跡から出土した木器について、器種分類と考古学的研究、樹種同定等の総合的な報告および研究がなされ、韓国における木器研究のひとつの基準となった。なお、最近までに木質遺物を出土した遺跡は120カ所余りに達している¹。

木器研究は、今後出土資料をさらに蓄積していく必要があるものの、土器や青銅器・鉄器と同様に個別研究を行うことが十分に可能である。実際のところ、これまで木器研究といえるものはほとんど皆無の状態であり、筆²、木製尺³など個別の遺物の説明や報告がなされる程度であった。しかし、光州新昌洞等から出土した木器に対する体系的な分類は、木器の考古学的研究に一定の基準を与えてくれた。また、2005年の湖西考古学会による『低湿地考古学』についての学術大会⁴、韓相曉・朴元圭による「百済泗泚期 木製遺物の道具痕跡の分析」⁵、金權九の「韓半島青銅器時代の木器に対する考察」⁶など、木器の製作と利用に対する研究が行われている。最近では、牙山葛梅里で木器生産地に対する調査・報告がおこなわれたことで、木器の生産と流通に関する研究の可能性も開かれつつあるのが現状である。

2. 木器の研究方法

木器は、前述のように低湿地にある遺跡では数多く出土するものの、遺存率が低く、大部分の遺跡からは出土しないため、木器だけからその用途を推測することは非常に難しい。

したがって、用途と機能を推測する際には、① 出土状況或使用痕の観察、② 民俗事例との比較・推定、③ 模造品による使用実験、④ 出土した遺物の集成および分類などによる考古学的分析をおこなわなければならない⁷。

また、木器の製作工程の復元を通して様々な情報を得ることができる。まず、木器をその用途に応じて製作するために、それぞれに適した木材を斧で切り倒し、原木を確保しなくてはならない。一般的には、遺跡周辺に植生している樹木から原木を選択し確保する。確保した原木を製作する器種によって分けるのだが、この時点で木器各々の用途に応じた樹種の選択がおこなわれる。

各器種に用いられた樹種は、遺跡から出土した木質遺物の樹種同定を通して知ることが

でき、当時の植生を復元することも可能である。また、用途に応じて時空間的に選ばれ好まれた樹種を知ることや、さらには木材の流通状況までも類推することができる。木器の原材料は、生態系と密接に関連があり、たとえ山林資源が周辺に存在していたとしても、どこかに木材利用に適した植生が存在しなければ木器製作は不可能である。さらに、このような植生に関する情報を通して、当時の食材料・燃料・景観等といった古代人の生活相にまで様々に接近することができるのである。実際に出土している木器の樹種を同定してみると、器種ごとに原材料の硬さや模様が異なり、それぞれの用途ごとの特徴に合うように製作されていたことを知る事ができる⁸。

個々の木器は、その用途や器種によって段階別に製作されるのだが、完成品の場合には実生活用と祭祀用に分類でき、未完成品は他の用途に転用したり、廃棄された。また、実生活品は使用後損傷すれば他の用途に用いられるか廃棄されるが、祭祀用は儀礼行為が終わった後に意図的に廃棄された。このように木器には、製作から使用、そして廃棄されるまでの多くの情報が含まれているのである。

切り出された原木は、望みの形に加工した後、さらにいくつかの段階を経るのであるが、加工段階別にみても、1段階は、伐採後これといった加工をせずに自然木をそのまま使用するもので、杭などがあり、樹皮が残存あるいはその痕跡が残っている場合が大部分である。加工痕も端部のみに仕上げが認められ、斧で切り倒されたものがそのまま使用されるものもある。

加工2段階は、樹皮を取り除き板材や角材に単純に加工するもので、各種農工具の柄や木筒、角材、板材等がある。

加工3段階からは用途が明らかな木製品で、部材を組み合わせることにより製作することや、精密な加工が必要な木製品では穿孔・回転削り・付加的な装飾等が施される。

加工4段階は、漆を施した木製品等である。

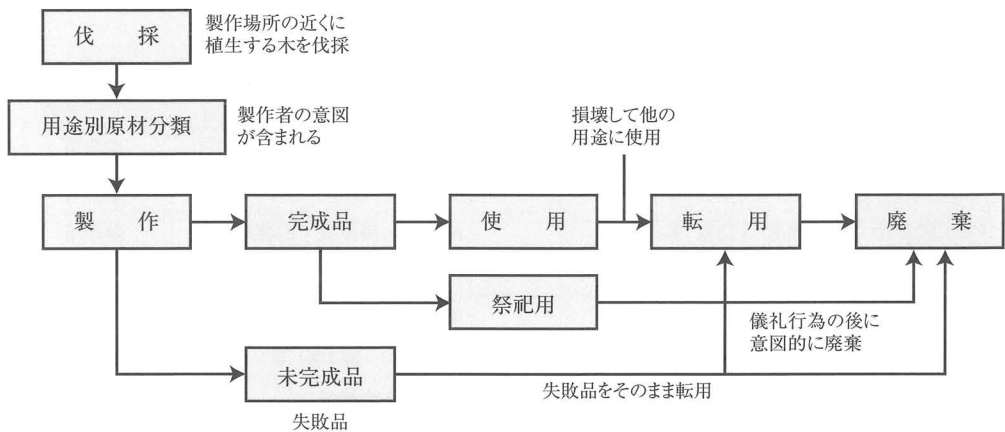
また、原木のどの部分を使用したのかについては、木製品の年輪の湾曲のありかたを観察することによって知ることができ、このことによりどのような原木のどのような部分を使用したのかを判断することができる⁹。

本稿では、多様な木器の中から食器類に対する検討を通してその種類と構造を明らかにし、さらには日常生活品と儀礼用品がどのような差異を持つのかについて見ていくこととする。

Ⅲ. 古代木製食器の組成と特徴

1. 出土事例の現状

韓国国内における木器の出土事例は、前述したようにさほど多くはなく、食器類の出土



第1図 木器の製作と使用

事例もまた資料が不足気味であるため、実際のところ、時空間的な分類や分析は非常に難しい状況にある。しかしながら、最近発掘調査された遺跡やすでに調査された光州新昌洞等で出土した遺物を見てみると、遺跡ごとの特徴に応じて、分類を試みる事が可能であると考えられる。

まず、これまでの出土事例をみると、初期鉄器時代から三国時代にかけて、咸安城山山城、光州新昌洞、慶山林堂、益山王宮里、扶余陵山里、釜山高村、昌寧松峴洞古墳等の遺跡から木製食器類が出土している。特に食器類の場合には、古い時期の手斧類で削ったものから、三国時代になると回転削りや漆塗りによるかなり高級な製品も生活遺跡から出土している。そして、各遺跡の特徴ごとに、製作技術や食器組成に差異がある。特に、百濟泗沘時代の中心地域である扶余における最近の発掘調査事例を見ると、扶余双北里等では高度な技術で製作された高杯や容器類等が出土しており、木器も階層区分が成されていたのではないかと考えられる。このことについては次章で取り扱うこととし、まず初期鉄器時代～三国時代における食器類の出土事例の現状を第1表および第2・3図に示す。

韓国国内において木器が出土した遺跡は、大部分が低湿地遺跡や古墳であり、これらの遺跡はいずれも木器が大きな損傷を受けにくい環境にある。また、木製食器類はその出土状況から副葬用と生活用に区分されるが、実際には器種ごとの構成の差異は大きくない。一方、日常生活で使用された木器と、副葬のために別途製作された木器のあったことが推測され、用途によって削りや漆塗り技法といった製作技法に差異のあったことがわかる。

2. 製作と使用

製作にあたってはまず、原材料の選別が行われるが、容器類の樹種の選択を詳しく見てみると、次のとおりである。新羅時代の月城垓子では、6点を分析した結果、ニレ属4点、クワ属1点、トネリコ属1点が識別された。ニレは、『三国史記』によれば、貴族が

第 1 表 時期別・遺跡別出土状況¹⁰

時代	遺跡名		遺物	性格
初期鉄器～ 原三国時代	全羅道	光州 新昌洞	皿・豆・蓋等	生活用(高級)
	慶尚道	金海 伽耶の森遺跡	漆豆・円筒形等	副葬用
		星州 栢田 礼山里	漆器碗・豆等	副葬用
		昌原 茶戸里	漆器豆・四角盒・円筒形等	副葬用
		咸安 道項里	筒形木製品等	副葬用
		昌原 新方里	把手付長方形容器等	生活用
三国時代	京畿, 江原	烏山 佳水洞	杓子(漆)・皿(漆)等	生活用
		原州 法泉里	坏・結合漆器等	副葬用
	忠清道	扶余 宮南池	漆器・生活用品等	生活用(高級)
		扶余 羅城(宮南池一帯)	さじ容器類・漆器等	生活用(高級)
		扶余 旧衙里	碗・皿類等	生活用
		扶余 陵山里	さじ・箸・皿等	生活用
		扶余 佳塔里	容器類等	生活用
		扶余 双北里	盤等容器類等	生活用
		扶余 双北里 280-5番地	漆器高坏・漆器皿類等	生活用(高級)
		錦山 栢嶺山城	木製杯等	生活用
	全羅道	光州 外村	容器底部片・漆器碗片等	生活用
		益山 弥勒寺址	漆器類等	生活用(高級)
		益山 王宮里	漆器類等	生活用(高級)
	慶尚道	慶州 金領塚, 飾履塚 壺杆塚, 天馬塚, 皇南大塚	漆器盒・漆器小碗等	副葬用
		慶州 雁鴨池	容器類等	生活用(高級)
		慶山 林堂 低湿地	高坏・碗・漆容器等	祭祀用
		釜山 機張 高村	漆杯等	祭祀用
		昌寧 松峴洞 古墳群	杓子・漆器蓋・仕切り付盤	副葬用
		咸安 城山山城	漆器容器類等	生活用

家を建てる際に広く利用されていたもので、六頭品以下は家を建てる木材にニレを使用してはならないという規制があった。このようにニレは高級木材であり、月城垓子から出てくる木器がすべて漆を塗っていることを見ると、一般人が使用するのには難しかったようであり、宮殿の中で実際に使用されていた貴重な木器であったことが推測される。

百濟泗沘時代の出土木製容器類14点のうち、ケヤキ7点、マツ3点で、ハリギリ、トネリコ、クヌギ、ハンノキ類が各1点ずつであることが明らかとなっている。ケヤキのように硬い木材に精巧な回転削りを施すためには、何よりも硬い木材を削るための刃が必要であり、そうした加工具を製作するための高水準の技術の存在を推定することができる。

また、漆塗り木器をはじめとする容器類18点を分析した結果、ハンノキ類・ヤマザクラ類・ヤマグワ類各3点、クリ類・樹皮（推定）各2点、マシウグルミ・ノグルミ・キリ・ヌルデ・アワブキが1点ずつ検出された。この中でハンノキは、材質が緻密であるが比較的柔らかく割れにくいいため、容器を製作するのに適した木材である。ヤマグワ類は硬く靱性と縦曲性があるが、切削と加工が難しい樹種で、クリも硬い材質の木材であり、このような木材を加工するために木材加工技術が発達したことが推定されている¹¹。

容器類には、材質が柔らかいハンノキ類・キリ類だけではなく、ヤマグワ類・クリ類のような硬い材質の木材も利用されていたことからみて、当時の木材加工技術は相当に発達していたものと考えられる。なお、食事具類の中で、蓋や匙と箸・杓子類等に対する樹種同定の事例については、分類可能な程の報告例がないため明らかにすることができないが、容器類と同様にある程度は樹種ごとの選択性があったものと推定される。

次に製作方法について詳しく見てみると、大部分は木器を立てた時に木材の長軸方向（木が育つ方向）と木器の方向が同じになるように製作されている¹²。製作方法は、手斧等を利用して容器の内側を削りぬいた後に、刀子で仕上げたり回転削りを利用して仕上げた。回転削りは回転力を利用して削るもので、高い熟練度が必要とされる製作技法であり、高級な容器に使用された可能性が高い。

咸安城山山城から出土した木器は、未完成品が多数を占めており、製作時の加工の痕跡がはっきりと観察できるものが多い。この事例をもとに、食事具類がどのような方法で製作されていたのかについて詳しく見ていくこととする。城山山城から出土した木器は、斧や鋸等によって原木を山から伐採した際の一次加工にともなう痕跡は観察されず、伐採した木材を整え加工する段階である二次加工の痕跡が主に観察されるため、山城内で製作されたものと考えられる。

大部分の木器の加工部位は、大きな幹や小さな枝部分を利用しているが、容器類のみは主幹部分を利用し、木目の方向に切断して加工した。道具の痕跡は、主に手斧痕が観察される。第4図①は、両側縁に鑿がつく皿状容器の内部を手斧で削りぬいた後、仕上げをせずに未完成のまま廃棄されたものである。③は皿よりも若干器高の高い容器類で、外面は手斧で全体を整え、小刀で内部を削り出して製作された未完成品である。外面に残された手斧の刃の加工方向を観察することができる。容器を伏せた状態で同じ方向に整えており、刃の痕跡が3箇所観察される。④と⑤は、内外面をそれぞれ異なる方法で加工していて、④は回転削りによって、⑤は手斧や刀子などの道具類を利用して丸く削って製作している。これを見ると、容器類の仕上げ方には、2種類があったものと考えられる。②は、製作後に漆を施した皿で、鑿の上面と内面の周縁に朱漆を施すのが特徴である。これらのことから、咸安城山山城の容器類は、手斧や内側を削り出す小刀などを利用して製作さ

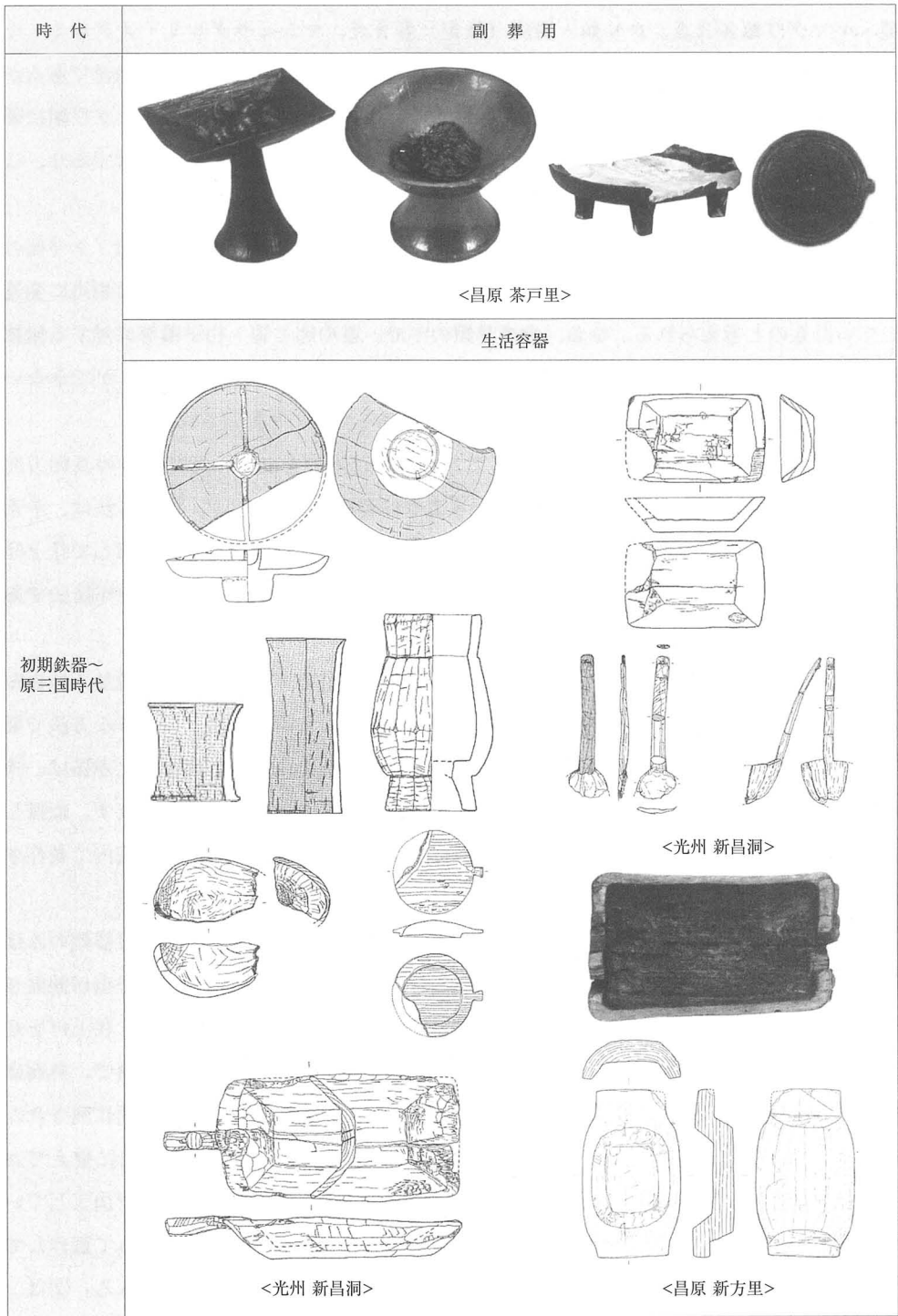


図 2. 木器の製作と使用

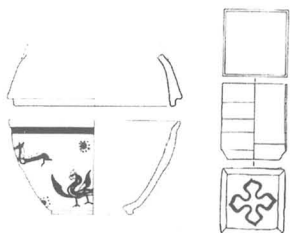


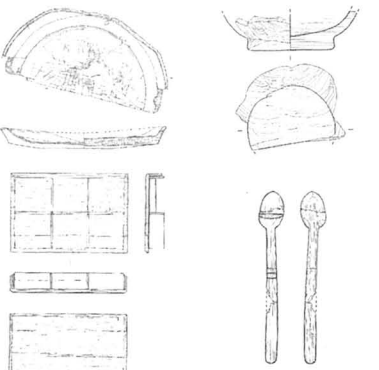
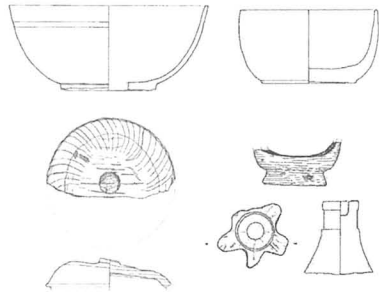
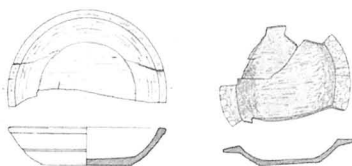
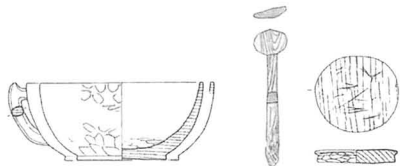
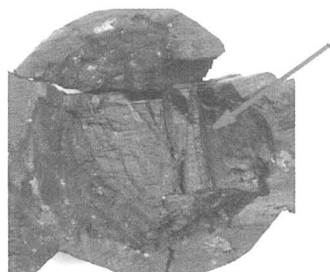
時代	副葬用
三国時代	 <p>〈慶州 皇南大塚南墳〉</p>  <p>〈昌寧 松峴洞7号墳〉</p>
	生活容器（高級器種）
	 <p>〈慶山 林堂〉</p>  <p>〈機張 高村〉</p>  <p>〈扶余 双北里ヒョンネドル〉</p>  <p>〈扶余 弥勒寺址〉</p>  <p>〈扶余 宮南池〉</p>
	一般生活容器
	 <p>〈咸安 城山山城〉</p> 

図3. 三国時代の食器類

れ、回転削りや漆塗りもなされていたことを確認することができる。

匙や杓子も出土しており、柄の部分を実別作りせず一体で製作するが、身の部分を削りだしていない失敗品や未完成品が出土しており、おおまかに元となる器形を削って完成させた後、最終段階に身を削りだしたと推定される。

以上のことから、咸安城山山城で出土した木器の製作工程において最も広範囲に使用されている道具は、手斧であったことがわかる。すなわち、不必要な木材部位を取り除く段階から、最終的な仕上げの段階まで広範囲に使用されていた。実際に工具類の出土事例を見ると、遺跡内で様々な大きさの手斧類が出土している。これ以外に容器の中には、回転削りを施すもの1点、漆を施したもの3点が出土しているものの、高度な加工技術を必要とする木器は基本的に確認されていないことからみて、山城内では水準の高い木材加工は



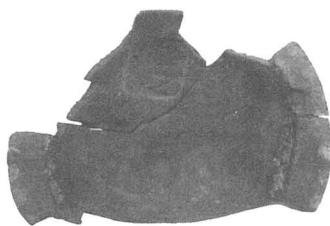
① 手斧で容器内を削りぬいた痕跡



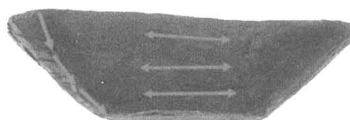
小刀の痕跡



手斧の方向

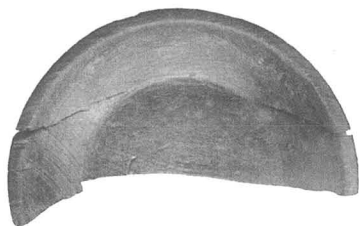


② 朱漆と黒漆が施された皿



手斧の方向

③ 小刀と手斧で製作された容器



④ 回転削りによる仕上げ加工



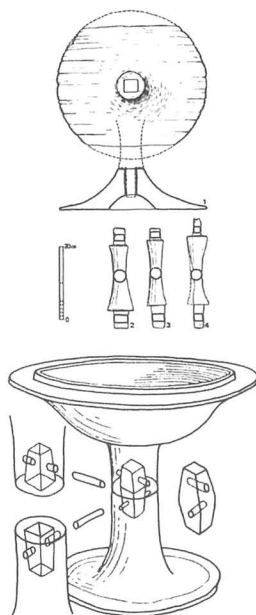
⑤ 手斧で丸く削られた容器

第4図 咸安城山山城出土容器類（国立伽耶文化財研究所 2008）

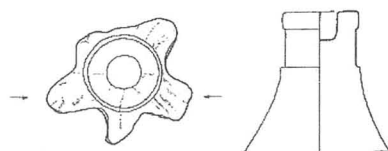
おこなわれなかったと考えられる。

咸安城山山城から出土した食事具類をもとに、その製作方法を類推してみると、原材料は木の主幹方向を利用して、手斧でおおまかに器形を完成させた後、容器等の内部を削り出す作業をしていたものと考えられる。さらには、ロクロのような回転力を利用した回転削りによって製作された場合があり、食器類の中では高杯類や鉢類・蓋といった器種で確認される。

また、土器と類似した形態に製作された高杯類は、その製作方法がやや特徴的で、杯部と台脚部を一体で製作する方法や、杯部と台脚部分を別々に製作して結合する方法で製作された。この相違が時期的な違いであるのかどうかはわからず、光州新昌洞から出土した漆器盤を除くと、原三国時代時代までは昌原茶戸里の高杯のように、杯部と台脚部が一体で製作されたと推定できる。三国時代に入っても二つの製作方法が共に確認され、慶山林堂や釜山機張高村から出土した高杯類のように台脚部分を別に製作し、結合する方法もさかんに行われていたものと推定できる。結合方法を模式的に示してみると、第5図のような姿であったと考えられる。第5図上にあげた模式図は、杯部と台脚部の間に付属結合具が追加されているが、台脚部の中央に溝があり、杯部の突出した凹面とかみ合わせて嵌め込むものである。扶余宮南池で出土した木製台脚部片と、釜山機張高村から出土した高杯の杯部片が、このような結合方法で製作・連結されたものと考えられる。そして、第5図の下にあげた模式図も、杯部と台脚部の間に若干異なる形態の付属結合具があるのだが、



第5図 高杯の台脚部結合模式図
(奈良国立文化財研究所 1993)



<扶余 宮南池 木製台脚片>



<釜山機張高村 高杯身部片>

第6図 結合式高杯の出土事例

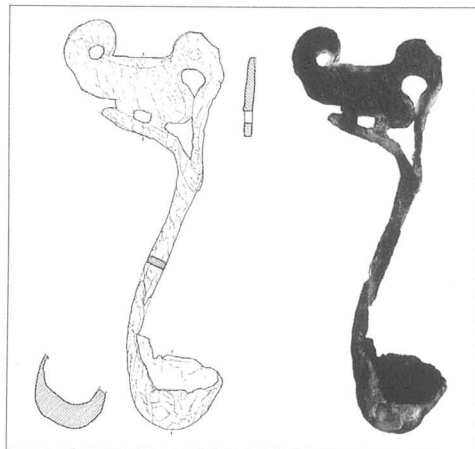
現在までの出土事例には確認することができず、今後報告される資料に期待したい。

容器類は、主に貯蔵用や食事の際に飲食物を入れる食膳用、食器類の付属具（蓋類）等として使用され、用途が祭祀用と日常用とに区分されていたこともわかる。そして木製食器類は、土器と併用されていたものと考えられる。例えば、貯蔵用や食膳用には、どちらも使用が可能であったであろうし、土器を利用して貯蔵する際に木製の蓋を使用することや、飲食物を調理する際に木製の甑や木製の蓋を一緒に使用することもあったであろう。

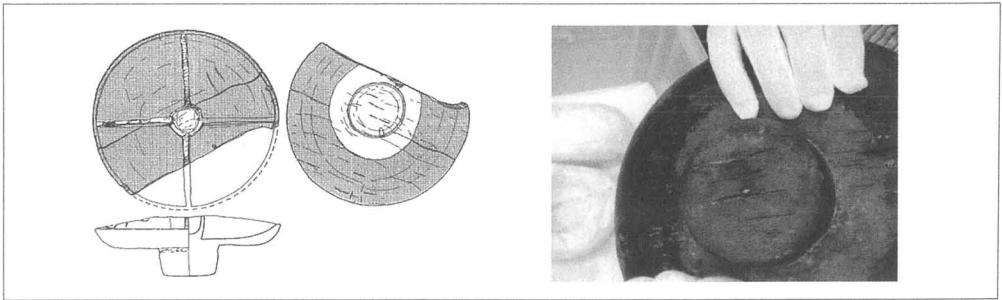
食器類の付属具である蓋類も、様々な形態のものが出土している。第2図の昌原茶戸里、光州新昌洞遺跡から出土した蓋のように、つまみのつくものもあり、第3図の扶余宮南池出土の蓋のように、土器と類似した形態のものもある。そして、慶州皇南大塚に見られるようなつまみのない盒の蓋も出土している。このような形態や製作技術の差異は、時間的そして地域的・階層的な特徴を示しているものと考えられる。本稿に示した資料だけを見ても、三国時代以前にはつまみのつく形態であったものが、その後に多様な形態が登場すると見ることもできそうである。咸安城山山城等の遺跡からもつまみのある形態の蓋が出土しており、今後より多くの資料が報告されれば、さらに時空間的な差異が明瞭になるものと期待される。

食事は、箸や匙・杓子・しゃもじ・まな板など食事や調理時に使用される道具類である。出土の状況を詳しく見てみると、光州新昌洞、牙山葛梅里、扶余宮南池、扶余陵山里、咸安城山山城等で杓子形木器・箸・匙等が出土している。特に、光州新昌洞から多様な形態の木製杓子としゃもじが出土しており、このような例を通して、初期鉄器時代から厨房用具と共に匙が普遍的に使用されていたことが推定できる。百済地域では扶余双北里、扶余陵山里寺址からも木製匙が箸と伴に出土している。昌寧松岷洞7号墳で出土した漆塗り杓子は、柄の部分に鳥の形状をした彫刻が施されていて、副葬用に特殊に製作されたものであると考えられる（第7図）¹³。

扶余宮南池、扶余弥勒寺址などで出土した木器の中には、漆を施したものが確認されているが、これらは上位階層によって使用されていたものと考えられる。なぜなら、ロクロによる回転削りにより精巧で器壁が薄くなるような仕上げ作業で製作されたものであり、高い水準の技術が必要とするため、一般階層には簡単に扱うことができないものであったと考えられるからである。



第7図 昌寧松岷洞7号墳出土漆器杓子



第8図 光州新昌洞出土漆器盤

漆は、堅固で丈夫な膜を形成するだけでなく、優雅な光沢とやわらかく品のある色感を持ち、防水・防腐・防虫・絶縁等の効果に優れた塗料である。漆の木から採集された漆液は、精製および加工過程を経て、木器や金属器といった耐久性を必要とする器物に装飾効果を与え、様々なかたちで使用されてきた。

こうした漆塗り木器の製作は、漆の栽培地が限定される上に、栽培することのできる量や採集にもかなりの制約がある。またその特性上、遠距離運搬や長期間の保管が難しいため、漆器製作は特殊な集団によってなされていたと考えられている¹⁴。すなわち、専門集団によって漆器類が製作されていたと推定され、『三国史記』の記録をみると「漆典」という職官があり、国家によって直接管理されていたことが確認される¹⁵。

したがって、漆器は上位階層で使用された高級器種であったと考えられるのである。考古資料を検討してみると、副葬用や祭祀用の遺物に漆を施したものが確認され、昌原茶戸里や慶州皇南大塚などに副葬された漆器や、祭祀用と推定される漆器を見ると、かなり華麗で精巧に製作されていたことがわかる。また、百済の中心地であった扶余から出土した日常生活容器のうち、精巧な製作技法の遺物には漆を施すものがみられる一方で、咸安城山山城から出土した日常生活容器には、ほぼすべて漆塗りされていなかったことを確認することができる。また漆は、防湿・腐食防止・光沢等の効果に加え、接着性も持っている。本体と台脚部分を別作りで製作した木器に対しても利用されていたと推定される。ただし、光州新昌洞から出土した漆器盤の下部のように、台脚部と連結されていたと推定される部分に漆の痕跡のないことが確認される例もある（第8図）。

前述のように、食器類の中で容器は主に製作に際し木の長軸方向に製作されている。しかし、これは当時の木の利用に関連するということも考えられる。実際、容器類を木の長軸方向に直交するように切断し製作するほうが¹⁶、製作時或使用時に大きな問題がない。しかし原材から長軸方向に直交するように製作すると、削って捨てる部分が多くなる。さらに大木の主幹部分は主に建築部材や柱として利用されるため、そのような部位の使用には、ある程度制限があったものと考えられる。よって、容器類は主に柁目方向で最大限の

数を製作し、大きな容器類の場合も、高杯類のように別作りで製作し、結合する方法をとっていた可能性が高い。以上のことから、漆や大きく太い樹種の木材は、国で直接管理・供給し、製作するようにある程度制限されていたものと考えられる。

IV. 古代木製食器の変遷と画期

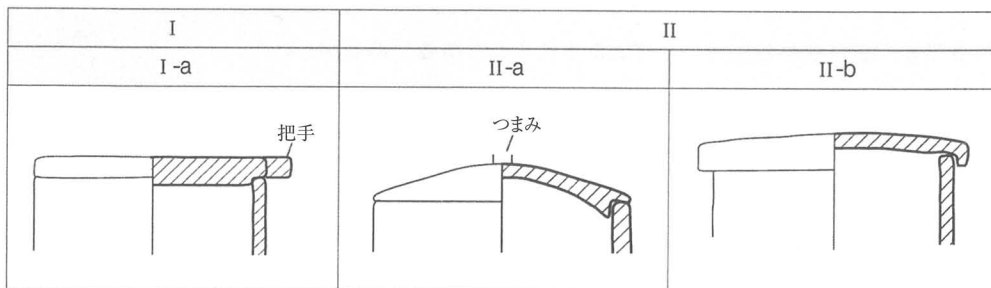
1. 木製食器の製作と組成の変遷

これまで木製食器類の出土状況、そして製作と使用に対して簡単に探ってきた。ここからは、木製食器類の製作および組成のありかたにどのような変化があったのか、土器とはどのような用途の区別をしていたのかをみていくことにしたい。まず、食器類の製作技術上の変遷を探てみると、次のとおりである。

原三国時代までは、手斧等の工具類で製作されて、丸い形態よりは四角い形態の容器類が多い。これは回転削り技術が未発達で、工具類等で丸く製作しなければならなかったという限界のためと考えられる。全体的に器壁も厚い傾向にある。蓋は、第9図のⅠ型式のように身部が扁平なものが大部分で、扁平なために端に把手が短く突出した形態が多い。

漆器も出土しているが、その製作技法を見てみると、主に黒漆を塗り、下地の漆はほとんど施されていなかったことがわかる。昌原茶戸里出土の漆器を分析した結果、漆に土粉を混ぜて下地漆とした後、純粋な漆を施したものが1点あったが、大部分は下地の漆を施していなかったことが確認された。不純物が漆層に分散したものや、漆が木材組織まで浸透しているケースも確認されている¹⁷。

三国時代になると、ロクロを利用した回転削りの技術が一般化し、胴部が丸い形態の器種が主流となり、器壁も非常に薄くなる。四角容器や盤容器（昌寧松峴洞、扶余双北里）も非常に精巧に製作されていて、特に原三国時代に見られたような手斧等の道具の痕跡が残っておらず、滑らかな仕上げ加工をおこない、器壁も非常に薄く製作されることが特徴である。口唇部には凹面がみられるが、やはりロクロ等の回転力を利用した仕上げ加工をしたものである。



第9図 蓋の形態と組み合わせ方

また、蓋の身部が膨らみをもつ形態に変化し、つまみも認められる。第9図のⅡ型式のように蓋との組み合わせ方が変化し、以前よりも技術的に発達した凹面形態を持つことがわかる。

漆器の製作技術も変化し、漆層→朱漆層の順に塗られ、下地の漆を用いたものの占める比重が高くなり、骨粉や土粉を下地の材料に用いた漆器が登場する¹⁸。また、装飾性が増し、多様な模様を朱漆によって施すことも流行していたことがわかる。

それでは、土器とは用途のうえでどのように区分されていたのだろうか？はたして古代人にとって食器とは土器だけだったのだろうか？食器は、当時の人々の食文化・食事様式を反映しているのである。

食器類は、貯蔵具・調理具・食膳具・容器付属具・食事具等に分類できる。まず、貯蔵具は穀物・肉類・魚類等の食材を貯蔵し保管する用途もあるが、現在までに出土した資料を見ると、壺類や甕類のような土製容器が主に利用されていたということがわかる。容量が大きく容器のなかにある程度長時間貯蔵しなければならないという点から、木製貯蔵具を使用するには、制限があったと考えられる。しかしながら、三国時代になると四角容器・盆・内側に仕切りの付いた四角い器等の多様な形態の木製容器類が出土し、飲食物ばかりでなくその他にも様々なものの貯蔵用としても一部に使用されていたと考えられる。

調理具としては主に土製の炊事具が使用され、飲食物に火を通す際に調理の効率性を高めるために、木製の蓋等を利用していた可能性もある。そして現在まで、韓国国内では出土した事例がないが、木製甕を利用していた可能性もある。韓国国内の原三国時代～三国時代の一部の遺跡では、長卵形土器の出土量に比べて甕の出土量の比率が幾分低い場合が多いが、魚類や野菜等を蒸す際には、器高が低く広口の形態の甕が有効であったと考えられ、実際に東南アジアのタイの一部地域では、木製と土製の甕を併用する民俗事例がある。これを踏まえれば、木製調理具の可能性も考えておく必要がある。その他にも調理時に必要なものとして、杓子・しゃもじ、細くて長い棒状木器等もある。

食膳具は、調理の前後に飲食物を盛る食器類であり、形態が最も多様で、木製・土製いずれも様々なかたちで製作・使用されていたと考えられる。また、日常生活から儀礼・副葬等に至るまでその用途は幅広いものであったと推測され、その形態は三国時代に入ると、一層多様化した（第2・3図）。扶余弥勒寺址や扶余宮南池、扶余双北里から出土した皿・鉢・碗等の遺物は、食卓に上る食器類が多様になったことがわかる事例である。これは土器も同様であるが、三国時代の木製食膳具は、その形態が現代の茶碗やおかず皿と大きく変わらないものであることがわかる。すなわち、原三国時代から普及したカマドと、蒸すなどといった調理方法の変化とともに、食卓における飲食物も多様化し、これに伴って食膳具の形態も多様になっていったものと考えられる。

容器付属具には、調理具や貯蔵具等に使用される蓋類があり、食事具には、匙・箸等があるが、土製よりは木製のものが主に使用されていたと考えられる。特に食事具は、軽くて簡単に製作できる木製のものが便利だったのであろう。

2. 日本古代の木製食器との比較検討

以上、韓国で出土した木器の中でも、食器類の組成のありかた・製作技術等について簡単に見てきた。現在までに報告された出土事例をもとに分類した結果、原三国時代までは副葬品を除くと、木製食器類の形態が非常に多様であったことがわかる。特に、光州新昌洞では非常に多様な食器類が出土していることを確認することができた。そして原三国時代後期～三国時代にかけて、製作技法が非常に精巧な高級器種、あるいは皿や飲食物を入れる食器類がより多様になり、食卓文化も定着していった。

それならば、同時期の日本ではどうであったのか。日本は、韓国とは異なり木器が出土した事例が多く多様であり、木器と関連する資料集・研究論文がたえず発表されていて、少数ではあるものの研究者達が活動を継続している。日本での木器研究は、韓国と同様、1930年代に低湿地遺跡の調査を通して開始された。以降、農工具に対する研究にはじまり、次第に各器種ごとの研究が進展していき、木の材質や原材利用のありかたに対する研究もなされている。特に1990年代になると、当時までの木器研究を足がかりにしながら、体系的な分類に基づいたしっかりとした研究の基礎が構築され、木器から社会の多様な側面を実証的に解明する方向へとまで発展するに至る¹⁹。

このような研究にもとづいて、木製食器類のありかたを見てみると、近畿地方では弥生時代中期に食器類の器種が非常に多様化し、弥生時代後期になると、高杯と鉢類は主に土製で、蓋を持つ貯蔵具や皿類は、主に木製へと器種分化が明確化した²⁰。また、木製食器類が土製食器類と併用されたことを知る事ができ、調理具や貯蔵用には韓国と同様に土製のものが主に使用されており、食膳具等については、土製と木製が併用されていたことが分かる。

これは韓国の原三国時代後期から多様化していく食器類の変遷のありかたと類似しており、食器類の多様化は、調理方法や食材の多様化を意味する。このような、多様な飲食とそれに伴う食器類の発達、食卓文化に画期をもたらしたとみることができる。

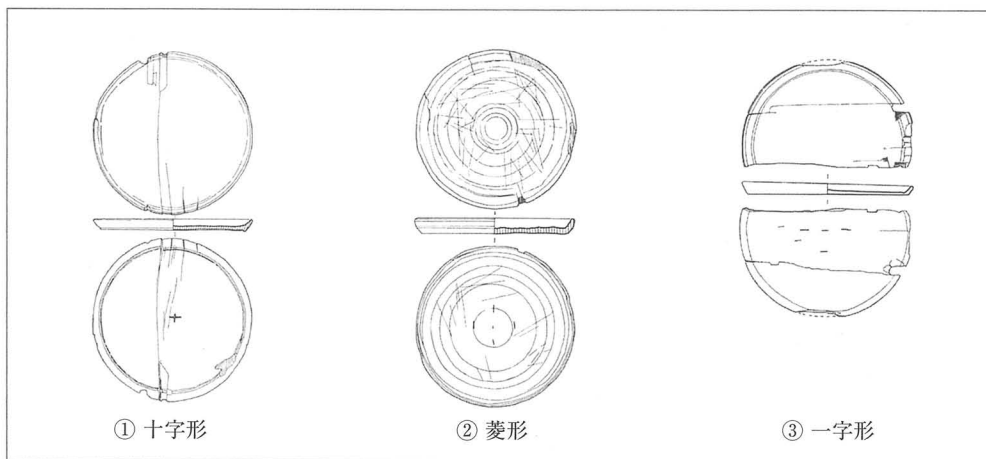
製作技法を見ると、食器類の製作方法には大きな違いはなかったように見える。多様な大きさの手斧や刀子で製作され、小枝と主幹を利用した農工具類や、主幹を利用した食器類等からみて、原材の使用方法も大きくは違ってはいなかったことがわかる。このような木器の製作技法の中でいくつか注目される点がある。まず、高杯類の製作技法である。前章でも述べたように、杯部と台脚部を別に製作して結合する方法や、黒漆と朱漆を塗り模様の効果を出すものがみられる。そして、韓国の高杯類よりも、杯部と台脚部端部が大き

く広がる形態のものが多く発達していたことがわかる。これら日本の木器は、遺物の出土事例が少ない韓国の木器の器形や用途を理解するうえで、重要な比較対象となるものと考えられる（第5・6図）。例えば、日本の大阪府池島・福万寺遺跡から出土した漆器の高杯は、韓国国内の釜山高村から出土した漆器高杯とよく似た製作技法が用いられている。多少の時期差があるので、交流といった側面に迫るには多少資料が不足している面があり、将来多くの比較資料が出土することを期待している。

次に、製作技術の中で、回転削りについてであるが、食器類の中でも皿類の場合は何かに固定しなければ回転削りを行うのは難しい。その方法を知る糸口は、日本の奈良県平城京や大阪府大蔵司遺跡から出土した皿にあった。回転削りをするために轆轤に固定していた痕跡が、皿の底部外面中央に観察でき、第10図のように十字形や菱形状に配列されているのが確認された。また、③のように不規則的な痕跡も観察されている。

以上のような製作方法は、木器製作に関わる技術のごく一部と考えられ、より多くの韓日の木器資料を観察すれば、まだまだ他の様々な製作技法を確認することができるであろう。さらに、杓子や匙や箸・しゃもじ等の食器類については、出土状態が良好でなくその形態を知ることが難しい場合も多いのだが、日本の資料との比較検討を通して用途を推定することができる。また、韓国から出土した木製の皿類に固定の痕跡を確認することはできないが、資料の調査をする際には留意して観察する必要がある。

漆工技術のひとつを詳しく見てみると、日本では木炭粉や黒炭類を漆と混ぜて塗った後、その上に純粋な漆を塗って黒く見せる方法があり、黒色の煤を漆に混ぜて塗り、その上にさらに漆を施す方法も確認されている。前者の場合には、韓国の古代漆器技法にはいまだ見つからないものの、中国の戦国時代初期と後漢代の楽浪墓で確認されている。後者は、韓国の昌原茶戸里から出土した漆器と類似した漆技法であることが確認された²¹。



第10図 大阪府大蔵司遺跡出土皿の固定痕跡

さらに、韓国から出土した漆器の中で、日本特産のコノテガシワというヒノキの一種で製作されたものが一部確認された。現在の出土資料は、主に扶余地域で確認されており、扶余双北里遺跡からは漆器の箱・方形漆器・漆容器等、多様な器種が出土し、生漆・黒漆・精製漆が使用され、樹種は日本の特産種であるスギであった。さらに、食器類ではないものの、扶余宮南池では日本産のスギ材で製作された紡織具が出土している。これらの遺物は、日本との交流の過程で流入したものとみられ、当時日本との間に活発な交流があったことを知ることでできる良い資料であるといえる。

V. おわりに

以上、木製食器の組成のありかた、製作と使用等に対して簡単に探ってみた。これらを通して他の遺物と同様に、木製食器類も変化し発展してきたことを知ることで、食卓文化の一端を不十分ながらも明らかにすることができた。

木器は、その性格上、機能や用途が明らかにならない場合が多く、完形の状態で出土しにくいと、検討には困難が伴う。また、発掘現場で出土した大部分の木器を保存処理しようとしても、物理的・時間的・経費的に困難なことも事実である。しかしながら、土器・石器・鉄器などのような遺物とは異なり、農工具類から食器類・生活用具・建築部材に至るまで、多様な用途に利用されている素材である。したがって、他の遺物研究と同様に、個別研究資料としての研究価値が非常に高いといえる。木器を観察する観点を多角的にすれば、生産・流通システムや階層化等の社会的側面、文化伝播、山林資源の活用方法の変化など、木器から解明できる範囲は広がっていくことであろう。

このような木器研究の重要性を認識し、木器自体を対象にした研究や生産・流通論等についての研究は、今後の課題といえる。そして、山林生態に関する知識をもった植物学者と発掘現場の歴史的意味を熟知している考古学者が、用語と知識を共有することで、今後より発展的な木器研究が可能になるものと期待する。

註

- 1 国立伽耶文化財研究所『韓国の 古代木器』国立伽耶文化財研究所研究資料集第41集、2008年。
- 2 李健茂「茶戸里遺蹟 出土 甌(筆)에 대하여」『考古学誌』第4輯、韓国考古美術研究所、1992年。
- 3 李康承「百濟時代の 자에 관한 研究－扶余 双北里遺蹟出土 자를 中心으로－」『韓国考古学報』第43集、韓国考古学会、2000年。
- 4 湖西考古学会『低湿地考古学』2005年。
- 5 한상효・박원규「百濟 泗沘期 木製遺物の 道具痕跡 分析」『韓国考古学報』55、2005年。
- 6 金權九「韓半島 青銅器時代 木器에 대한 考察」『韓国考古学報』第67集、韓国考古学会、2008年。
- 7 奈良国立文化財研究所『木器集成図録－近畿原始篇－』奈良国立文化財研究所史料第36冊、1993年、p.3。
- 8 国立伽耶文化財研究所『韓国の 古代木器』（前掲註1）。
- 9 国立伽耶文化財研究所『韓国の 古代木器』（前掲註1）。
- 10 現在までに発刊された報告書及び現場説明会資料集にもとづいており、現在発掘調査中の遺跡やまだ未報告の遺物があるため、今後資料は増加することが期待される。
- 11 国立伽耶文化財研究所『韓国の 古代木器』（前掲註1）。
- 12 慶山林堂洞低湿地から出土した容器類の様に、これとは異なり長軸方向と直交する横方向に製作された事例もある。ただし、大部分の場合には長軸方向に製作されている。
- 13 昌寧松岷洞7号墳から出土した漆器杓子に彫刻された鳥模様が注目され、鳥は古代から地と天、人間と神を連結する役割をしたとみられている。このため鳥を形象化した鳥形木器は儀礼用に用いられたと推定される。これまで咸安山城、牙山葛梅里、扶余宮南池、論山麻田里、河南二聖山城などで出土しており、水路、井戸、農耕などと関連した遺構で主に儀礼用として使用されていたことがわかっている。
- 14 国立中央博物館『갈대밭 속의 나라 茶戸里』2008年。
- 15 「漆典 景德王改爲飾器房 後復古（漆典は景德王代に改めて飾器房としたが、後に旧称に復した）」『三国史記』卷第三十九、雜志第八職官中
古代から漆は重要で特別に取り扱われ、統一新羅時代には漆典という職官があって、景德王代には飾器房と呼ばれ、高麗時代にも軍器監に漆匠、中尚署に螺鈿匠と漆匠を配置している。朝鮮時代には工曹の山澤司が漆器を管掌し、漆匠と螺鈿匠を工曹の尚衣院におき、軍器寺に漆匠を配置し、地方官庁においては都邑の機関に漆匠を配属した。また高麗文宗10年には各地方官に漆を徴用するようにさせ、宣宗5年には雑税として漆を徴収する制度を定めもした。その用途としては各種武器類及び弓矢などに最も多く用いられ、朝鮮時代には楽器類、祭器、国家の儀礼用品、衣装、建造物、食器、装飾品などに使用範囲が広がった。
- 16 慶山林堂洞低湿地で木の長軸方向と直交する方向に製作された事例が確認されているが、これは小さい容器であるために、太い木で製作された可能性もある。
- 17 李龍熙「茶戸里 遺蹟 出土 漆器遺物の 漆技法 特徴研究」『茶戸里 遺蹟 発掘 成果와 課題－茶戸里 遺蹟発掘 20周年 国際学術심포지엄』国立中央博物館、2008年。
- 18 李龍熙「茶戸里 遺蹟 出土 漆器遺物の 漆技法 特徴研究」（前掲註16）。
- 19 国立伽耶文化財研究所『韓国の 古代木器』（前掲註1）。
- 20 長友朋子「弥生時代の食器組成の変化と食器生産」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』出土木器研究会、2009年。
- 21 李龍熙「茶戸里 遺蹟 出土 漆器遺物の 漆技法 特徴研究」（前掲註16）。

参考文献

【韓国語】

- 高麗大学校考古環境研究所『牙山 葛梅里(Ⅲ区域)遺跡』2007年。
- 国立慶州文化財研究所『月城垓子 発掘調査報告書Ⅱ』2004年。
- 国立慶州文化財研究所『月城垓子 発掘調査報告書Ⅱ－考察－』2006年。
- 国立扶余文化財研究所『王宮里発掘調査報告Ⅴ』2006年。
- 国立扶余文化財研究所『宮南池 発掘調査報告書』1999年。
- 国立扶余文化財研究所『宮南池Ⅱ－現宮南池 西北辺一帯－』2001年。
- 国立扶余文化財研究所『宮南池Ⅲ 南辺一帯 発掘調査報告書』2007年。
- 国立扶余博物館『宮南池』2007年。
- 国立昌原文化財研究所『昌寧 松峴洞古墳群6・7号墳 発掘調査概報』2006年。
- 国立昌原文化財研究所『咸安 城山山城』1998年。
- 国立昌原文化財研究所『咸安 城山山城Ⅱ』2004年。
- 国立昌原文化財研究所『咸安 城山山城Ⅲ』2006年。
- 文化公報部 文化管理局『雁鴨池発掘調査報告書』1978年。
- 文化財管理局 文化財研究所『皇南大塚 南墳発掘調査報告書』1994年。
- 文化財管理局 文化財研究所『皇南大塚 北墳発掘調査報告書』1985年。
- 文化財研究所・慶州古墳発掘調査団『月城垓子発掘調査報告書Ⅰ』1990年。
- 東亜細亜文化財研究院『釜山高村 宅地開発事業地区内文化遺跡発掘調査現場説明会』2008年
- 東亜細亜文化財研究院『昌原 芳里遺跡』2009年。
- 嶺南考古学会「発掘調査現状－慶山 林堂 低湿地遺跡 発掘調査」『嶺南考古学』第21集、1997年。
- 李健茂 他「昌原茶戸里遺跡発掘調査進展報告（Ⅰ）」『考古学誌』第1輯、韓国考古美術研究所、1989年。
- 李健茂 他「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅱ）－第3・4次発掘調査概報－」『考古学誌』第3輯、韓国考古美術研究所、1991年。
- 李健茂 他「昌原 茶戸里遺跡発掘調査進展報告（Ⅲ）－第5次発掘調査概報－」『考古学誌』第5輯、韓国考古美術研究所、1993年。
- 趙現鐘 他『光州 新昌洞 低湿地遺跡』Ⅰ、国立光州博物館、1992年。
- 趙現鐘 他『光州 新昌洞 低湿地遺跡』Ⅱ、国立光州博物館、2001年。
- 趙現鐘 他『光州 新昌洞 低湿地遺跡』Ⅳ、国立光州博物館、2002年。

【日本語】

- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録－近畿古代篇－』奈良国立文化財研究所史料第27冊、1984年。
- 出土木器研究会『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』2009年。
- 滋賀県立安土城考古学博物館『王権と木製威信具－華麗なる古代木匠の世界－』2005年。
- 埋蔵文化財研究会・第39回研究集会実行委員会『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』1996年。

古代 木製 食器의 組成과 特徵에 대한 檢討

정 수 옥

요 지 최근 저습지유적에 대한 조사가 활발히 이루어지면서 목기유물이 많이 출토되면서 고고학에서 한 분야로 주목받기 시작했다. 그 종류는 일상생활구류나 농공구류부터 건축부재들까지 매우 다양하다. 이에 본고에서는 다양한 목기유물 중에서 식기류에 대한 검토를 통해서 당대의 식탁문화에 대해 살펴보고자 하였다. 목제 식기류의 경우, 이른 시기의 자귀류의 깎기 방식에서 삼국시대에 이르면 돌려깎기나 옷칠 등 상당히 고급화된 기종들이 생활유적에서 출토되고 있다. 그리고 유적별 특징에 따라서 제작기술이나 식기 조성에서 차이점이 나타나고 있다. 특히 백제 사비시대 중심지역인 부여의 최근 발굴조사 사례를 보면 부여 쌍북리 등에서는 고급화된 기술로 제작된 고배나 용기류 등이 출토되고 있어 목기유물에서도 계층별 구분이 이루어졌던 것으로 보인다. 제작기술의 변화양상을 살펴보면 원삼국시대까지 자귀 등의 공구류로 제작하고 있으며, 둥근 형태보다는 사각형태의 용기류가 많고, 전체적으로 기벽이 두꺼운 편이다. 뚜껑은 배신부가 평평한 것이 대부분이고 가장자리에 손잡이가 짧게 돌출된 형태가 많다. 칠기도 출토되었는데, 그 제작 기법을 살펴보면, 주로 흑색 칠을 발랐으며, 바탕칠은 거의 이루어지지 않았다. 이후 삼국시대에 들어서면서 녹로를 이용한 돌려깎기 기술이 일반화되어 동체부가 둥근형태의 기종이 주류를 이루며, 기벽도 매우 얇아진다. 뚜껑은 배신부가 볼록하게 들린 형태이고, 뚜껑의 꼭지가 있다. 칠기의 제작기술도 변화된 형태가 나타나는데, 옷칠층→주칠층 순으로 발랐으며, 바탕칠이 차지하는 비중이 높아지고 골분이나 토분이 바탕칠의 재료로 사용된 칠기가 등장하고 있다. 한편 일본의 목제 식기류들은 우리나라에 비해서 매우 다양하게 출토되고 있음을 알 수 있는데, 이러한 다양한 목제식기류의 비교검토를 통해 우리나라에서 출토되고 있는 목기유물들의 용도나 제작기술에 대한 해답을 찾을 수 있는 좋은 비교자료를 제공하고 있다. 또한 유물들 중에서는 일본 특산수종이 확인되어 일본과의 교류가 있었음을 알 수 있는 좋은 자료이다. 이와 같이 목제 식기류의 검토를 통해서 시기별로 차이가 있으며, 그 안에서 발전양상이나 유적별 위계화가 이루어졌음을 알 수 있었으며, 당시 일본과의 활발한 교류가 있었음을 알 수 있다.

주제어 : 목제 식기류 용기류 식사구 칠기 목기제작기술 식탁문화

Examination of assemblage and features of ancient wooden dishes

Jung, Su-Ock

Abstract: This study took examination for ancient wooden dishes. Having been unearthed from ancient living sites, high qualified-spinnig cut, lacquered-wooden dishes are getting more attention in these days. Making techniques and assemblage sets seem diverse according to each sites. Based on the case of excavation in Ssangbukri, Buyeo where had been centre region of Baekje, wooden dished seemed to got hierarchical rules in production. Wooden dished produced until proto-three kingdom age got early features involving adz using, rectangle shape, thick body, flat cover, and short knobs. Lacquered dishes were also produced in the way of painting black lacquer having no foundation coating. After that, round shape, thin body caused by using wheels in making process appeared in three kingdom age. Cover dishes have round body and knob. Lacquered wooden dishes had changed in making techniques; painting black-red order, rising ratio of foundation painting using bone or earth. In the case of Japan, ancient Wooden dishes known until now are more various than that of Korea and this could help in examining wooden ware unearthed from Korean peninsular. Wooden dishes that are made of exclusive tree spices of japanese were also excavated in Korea. That could make study about interaction between Korean peninsular and japanese archipelago. Through the examining of wooden dishes, it could be suggested that there were diachronic transition in making techniques, hierarchical rules in production, and also interaction between Korean peninsular and japanese archipelago.

Keywords: Wooden eating utensils, Wooden containers, Eating tools, lacquerware, Wooden tool making technique, Table manners